

# インドの宗教に於ける「十六」の概念

渡辺章悟

*watanabe sbogo*

## 序

「16 アンナ (anna) 1 ルピー (rupee)」。かつてインドを旅した人にとって、この貨幣の単位は懐かしいものだろう。最近まで用いられてきたこの十六進法の起源は意外に古く、紀元前 200 年から後 200 年までの間に成立した『マヌ法典 (Manusmṛti)』や、それと同じ頃に成立したとされるカウティルヤの『実利論 (Arthaśāstra)』にもみられる。それは度量衡、とくに金や銀の重さの単位である「マーシャ (māṣa)」、あるいは「マーシャカ (māṣaka)」である。

『マヌ法典』では金の重量として「十六マーシャがースヴァルナ (suvarṇa)」、銀の重量では「十六マーシャカがーダラナ (dharāna)、あるいは一プラーナ (purāṇa)」とされる (8-134、136)<sup>(注1)</sup>。『実利論』でも「十六〔黄金マーシャカ〕がースヴァルナ、またはカルシャ (karṣa) である」、「十六〔銀マーシャカ〕、あるいは二十個のシンバー豆 (śaimbya) がーダラナである」(2-19-3、6)<sup>(注2)</sup>と同様に述べている。

そのほかにも、十六 (ṣoḍaśa-) を一纏めとするさまざまな括り型や、十六を節目とする用例は枚挙に遑がないほどである。さらには、数詞としての十六 (ṣoḍaśa-) 以外に、「アシュティ」(aṣṭi) や「カラー」(kalā) などの語が十六あるいは十六分の一の代用語としてしばしば用いられている。これらをみてもインド文化史上における十六の重要性は明らかであろう。本稿の目的は、インド文化に共有された十六の概念がインドの宗教文献のなかでどの様に扱われているのか、それがどのようなグループ

によって伝えられ、いかなる役割を果たしてきたのか、つまりインドの宗教における「十六」の概念の脈絡を明らかにすることにある。

## 1. 古代インドにおける数の概念

古代文明では自然現象からある種の象徴表現を読み取るために数の概念を用いたり、単語、あるいは文章などに特定の数値を含意させて象徴解釈を行うことがしばしばある。例えば、ピタゴラス学派は一切のものの原理として数をとらえ、宇宙が数に則った秩序を保っているという宇宙観を考案していた(注3)。また、ユダヤ教神秘主義のカバラ(Kabbala)はゲマトリア(gematria)といわれる文字の数値転換を持つことで知られ、ヘブライ語のアルファベットそれぞれに一定の数値を対応させ、より深化させた神学解釈を行った(注4)。

ちょうどインド文化もこれらと同じような文字と数字の対応関係を考案している。これを数秘学(Numerology)と呼ぶべきか否かは断言できないが、インドの場合は物の名や概念によって、特定の数字を暗示する方法が極めて発達していた。南インドでは碑文や銘文にさえも数字を使う代わりに文字や単語を用いていたほどである。この体系は数学、天文学、音韻学などの発達にともなって確立されたものであるが、古代インド人の執拗な数字への拘りを垣間見ることができる。古代インドの単語による数字概念の体系については既にE.W. Hopkins、G. Bühler、B. Walker、P.V. Kane、A.B. Keith、J. Gonda、松濤誠達氏らが言及しているので以下は彼等の研究に従って主なものを取り上げてみよう(注5)。

0—śūnya ; kha•ambara•gagana•ākāśa (虚空)。

1—eka ; bhūmi•mahī (大地)、indu•śaśin (月)、rūpa (一部)、ādi (始め)、pitāmaha (ブラフマン)、nāyaka (英雄)。

2—dvi ; akṣi•locana (眼)、kaṛṇa (耳)、bāhu (腕)、kara (手)、

- yama, yamala (双子)。
- 3—tri; loka ([三] 界)、gṇa ([三つの] 特性)、agni•hotṛ ([祭] 火)、krama ([ヴィシュヌの三] 歩)。
- 4—catur; abdhi•samudra (海)、yuga (ユガ期)、varṇa (四カースト)、veda•śruti (ヴェーダ)、kṛta (賽子)。
- 5—pañca; indriya (感覚器官)、artha•viśaya (感官の対象)、bhūta (構成要素)、iṣu (カーマの矢)、prāṇa (生氣)。
- 6—ṣaṭ; rasa (味覚)、ṛtu (季節)、darśana (哲学)。
- 7—sapta; ṛṣi•muni (仙人)、svara ([オクターブの] 音符)、aśva ([太陽の] 馬)、dhātu (身体の構成要素)、chandas (韻律の一種)、giri • parvata (山)。
- 8—aṣṭan; vasu (神々)、sarpa ([八大サルパ] 蛇)、mataṅgaja ([八方を守護する] 象)、siddhi (超能力)、anuṣṭubh (一句八音節からなる韻律)。
- 9—navan; saṅkhyā (1〜9までの数)、Nanda (九ナンダ竜王)、chidra (身体の九穴)、go•graha•nabhaścara (九惑星)、nidhi (クベーラの九宝)。
- 10—daśan; diśā ([十] 方)、avatāra (ヴィシュヌの化身)、rāvaṇaśiras (ラーヴァナの頭)。
- 11—ekādaśan; maheśvara (神)、rudra ([十一の] ルドラ神)。
- 12—dvādaśan; āditya•arka•sūrya (太陽)。
- 14—caturdaśan; manu ([第十四代の] マヌ)、indra (インドラ神)、loka ([十四の] 世界)。
- 15—pañcadaśan; tithi (太陰日)、pakṣa (半月)。
- 16—ṣoḍaśan; kalā (月の食分)、aṣṭi (一パダが十六音節からなる韻律)、bhūpa•nṛpa•rājan ([十六] 王)、puruṣa (原人プルシャ)。
- 20—vimśati; nakha (爪)、aṅguli (手足の指)、kṛti (二十音節の韻律)。

32—dvātriṃśat ; daśana (齒)、dvija ([再生するものとしての] 齒)、  
danta (齒)、anuṣṭubh (三十二音節からなる韻律)。

33—trāyastrīṃśat ; sura (神々)。

## 2. 「十六」を重視する古代インドの宗教文献

古代インドの宗教生活を規定した法典類でとりわけ「十六」(ṣoḍaśa-)が重視されたことは、以下の『マヌ法典』の三つ(【A】【B】【C】)の引用によっても知ることができる。

【A】 ye pākayajñāś catvāro vidhiyajñasamanvitāḥ /  
sarve te japayajñasya kalām nārhanti ṣoḍaśīm // (Ms. 2.86)  
「四調理祭 (pākayajña) 及び [ヴェーダの] 規定に従って行なわれる  
供儀のすべては、低音での祈禱による供儀の十六分の一にも値しない。」

冒頭の調理祭 (pākayajña) とはソーマ祭とならぶヴェーダの宗教の代表的な供儀で、マハー・ヤジュニヤとも呼ばれる。これは細かく言うと、神々・祖霊・人間・鬼神の四種に区別される(注6)。さらに、ヴェーダに規定された供儀とは新・満月などに (darśapaurṇamāsādayas) 行われる日常的祭儀である。しかし、これらの効果は、バラモンがこれのみによって、最高の目的を達すると言われる低音での [祈禱による] 供儀 (japayajña) のわずか十六分の一にさえも及ばないというのである。

この場合の「十六分の一にも値しない」(kalām nārhanti ṣoḍaśīm) という句は、サンスクリットの分数の表現としても代表的なものであるが、この用例でも分かるように「あらゆるもののうちのほんの一部」すなわち、極僅かであることを強調するために用いられる語句である。

このフレーズが当時すでに定型化していたことは同じ『マヌ法典』の次の偈頌に用いられていることから確認できる。

turīyo brahmahatyāyāḥ kṣatriyasya vadhe smrtaḥ /  
vaiśyē'ṣṭamāṃśo vṛttasthe śūdre jñeyas tu ṣoḍaśaḥ// (Ms. 11.  
125)

「〔故意の〕クシャトリヤの殺害に対しては、バラモンの殺害の〔贖罪の〕四分の一が定められる。〔定められた通りに正しく〕生きているヴァイシャの殺害に対しては八分の一、シュードラの殺害に対しては十六分の一なるを知るべし。」

『マヌ法典』によれば、バラモン殺しは死刑に値する最大の罪(マハー・パータカ)であるのに較べ、シュードラの殺害に対する贖罪は、準大罪(ウパ・パータカ)に分類され、バラモンの場合の「十六分の一」でよいとされる。この偈頌から判るように、四の倍数を四ヴァルナに対応させ、それぞれ四分の一、八分の一、十六分の一という分数を作り、しかも十六に「全て」が含意されていることが指摘できる。

「十六分の一」という慣用語は仏教でも初期の文献から用いられている。例えばパーリ『相應部』(LV.1)では、「四方を獲得したもの(転輪聖王)は四法を獲得したもの(仏弟子)の十六分の一にも値しない」(注7)とか、パーリ『法句経』に「愚か者はたとえ毎月茅草の端につけて〔ごく少量の〕飲食をとったとしても、法を思忖する人の十六分の一にも及ばない」(注8)などがあるように、最初期の仏典にもしばしば見出される。

一方、仏教梵語で書かれた『法句経』「千という〔数にちなんだ〕〈sa-hasra〉」第21章にはパーリ語の『法句経』にはなかった幾つかの偈頌が挿入されている。それらは、上に引用した同経の偈頌とほぼ同じ内容である「仏(法・僧)を信仰する人の十六分の一にも及ばない」(注9)というストック・フレーズが繰り返される注目すべき章である。この章はパーリ『法句経』(第8章)と仏教梵語の『法句経』(第21章)では偈頌の順序も内容も相違しているが、パーリ『法句経』に含まれる偈頌は仏教梵語のそれに大部分含まれており、後者は前者に基づいて増広されたもの

と推察される。本章の最初の数偈はその両者に共通する。以下、その最初の偈をパーリ『法句経』(Pāli Dhamma)から取り上げてみよう。

sahassam api ce vācā anattapadasaṃhitā /  
ekam atthapadaṃ seyyo yaṃ sutvā upasammati// (P.Dh. 100)  
たとえ無益な語を千回語ったとしても、  
聞いて心の静まる有益な語句の一つ聞くほうがすぐれている。

この「千」と「一」を対比させた表現は、「千」という章題が示すように、この偈頌に続いてしばしば繰り返される。仏教梵語の『法句経』では、この同類の数偈の後、後代の付加と見なされる「AはBの十六分の一にも及ばない」というストック・フレーズを含む偈頌が登場する(382—388偈)。したがって、先の「千のAより一つのBのほうが勝れている」というフレーズこそが、「AはBの十六分の一にも及ばない」というストック・フレーズに展開したと考えられる。そうであるならば、「十六分の一にも及ばない」とは、要するに主語を変えて「勝れている (seyyo = (Skt.)sreyam)」と言っているにすぎないであろう(注10)。

【B】 savyāhṛtipraṇavakāḥ prāṇāyāmās tu ṣoḍaśa /  
api bhrūṇahaṇaṃ māsāt punaṃty aharahaḥ kṛtāḥ// (Ms. 11.249)  
「ヴィヤーフリティ (vyāhṛti) (七つの世界の名) 及び [聖音] オームを唱え、十六回の制息を日々反復するならば、学識あるバラモンの殺害者さえも、一カ月の後には浄められる。」

これは【A】の用例と関係し、満数としての「十六」を表わす。本偈頌ではバラモン殺しという大罪を犯したとしても、一カ月、日々ヴィヤーフリティ (vyāhṛti 七つの世界の名) 及び [聖音] オームを咬き、日に十六回呼吸を制御すれば、罪が消えるとする。この十六回の制息は仏教にも取り入れられ、十六種類の呼吸法 (安般念の十六事) として定型化されるに至る(注11)。

満数としての十六の用法も後世に大きな影響を与えたい。例えば、11世紀頃に成立したとされる錬金術の代表的テキスト『ラサルナヴァカルパ (Rasārṇavakalpa)』には、「各回に、十六分の一の量の水銀を用いて、ビージャ (bija) —— 卑金属を金や銀に変成するために、水銀と調合する種としての純銀か純金 —— の使用を十六回実行すると、水銀はその〈煙り〉だけで卑金属を貴金属に変成する能力を得る」(725) といっている(注12)。

【C】 keśāntaḥ ṣoḍaśe varṣe brāhmaṇasya vidhīyate /  
rājanyabandhor dvāvīṃśe vaiśyasya dvyadhike tataḥ // (Ms. 2.65)  
「剃髪式 (keśānta) は、バラモンが十六年目になったとき、クシャトリヤが二十二年目、ヴァイシャがそれより二年後と定められる。」

この引用は宗教儀礼としての断髪式について述べたものである。『マヌ法典』によれば「バラモンの入門式 (sāvitrī) [の時期] は〔妊娠後〕十六年を経過すべからず」(2.38) とあるように、バラモン階級は十六歳で入門式を迎え、バラモン社会の一員として再生するのである。もし、再生族であり、上に規定された年までにイニシエーション (upanayana) を執行しない者は、ヴラーティヤとなってヴェーダ社会から脱落し、再生族の資格を失うとされていた(注13)。この入門式の伝承は『嫌悪聖典本生物語』(Asātamantajātaka) といわれるジャータカ伝(注14)にも見られるものであり、バラモンの学生期の目安とされている。また、タントラ文献で十六歳という年齢が特別な意味を持っているのはこの入門式と係わっているであろう。

以上のことから、【A】の十六分の一とは、ごく少量を表わす決まり文句であり、比較用法として用いられている。そして、その場合でも「十六」とは【B】【C】と同じく全体・総体、満数を表わし、節目の数として用いられることが分かった。なお、この場合のカラー (kalā) は部分とい

う意味であり、後述するような十六分の一という意味ではない。

### 3. 祭祀における「十六」

ヴェーダの宗教と十六の係わりはそれだけではない。先の法典類と並んでカルパ・スートラ（祭式儀礼綱要）に属する『シュラウタ・スートラ』は大規模な祭式儀礼に関する典籍であるが、これらの中にも十六の概念がしばしば現われる。例えば十六人の祭官によって行われる壮大な犠牲祭にショードシャ・ルトヴィクラトゥ（*śoḍaśartvikratu*）がある。普通は四人の祭官（勸請僧 *Hotṛ*、供養僧 *Adhvaryu*、祈禱僧 *Brahman*、詠歌僧 *Udgātṛ*）で行われるが、それぞれが三人の補助祭官を伴うので合計十六人となる（注15）。これも祭官の合計人数がたまたま十六人になっただけではないだろう。

また、ソーマ祭に属するラージャスーヤ（*rājasūya*）祭といわれる王の即位式の中心となる灌頂儀礼の際、中央に立つ王の頭頂に注がれる水は、この祭祀の由来となるラージャスーヤ（*rājasūya*）すなわち「王を生むもの」と呼ばれる。この水は十六種類ないし十七種類の水を集めて、それを一つの容器に納めて、これを儀礼的に浄化することによってつくられるという（注16）。この「十六」は総体・完全を暗示するものと見られる。

さらにまた、再生族でありながら一定の年齢に達しても師匠について学習しない者は、ヴラーティヤ・ストーマ（*Vrātya-ṣtoma*）といわれる犠牲祭を行なわない限り、すべての権利を失うとされるが（*Yājñavalkya-smṛti*, 1. 37, 38）、この祭式にも「十六詩節からなるストーマ（*ṣtoma*、詠唱の形式）」が繰り返し用いられる。この十六韻律は実際にはアヌシュトゥブ（*anuṣṭubh* 32音節からなる韻律  $32=16\times 2$ ）であるが、この旋律を使用することによって、ヴラーティヤ的流浪生活を送るものはその欠陥を補充することができ、その罪過、災いから解放されるという（注17）。

この再生族の補填儀礼ともいえるヴラーティヤ・ストーマ祭はソーマ



祭の一種であり、アグニ・ストーマ (agniṣṭoma) ともいわれる。最古の法典であるガウタマ (Gautama) の *Dharmasūtra* (VII. 14–24) によれば、ソーマ祭はこの Agniṣṭoma の他、Atyagniṣṭoma, Ukthya, Ṣoḍaśin, Vāpajeya, Atirātra, Āptoryāma という七種類に分けられる(注18)。その第四が「十六を有する」(Ṣoḍaśin) という異例の名前を持つ犠牲祭である。これは十六の賛歌 (ṣoḍaśi-stotra) を唱える十六段階の祭式からその名前を得ているのであるが、ソーマ祭そのものの原型といわれ(注19)、ここでも十六という数字が非常に重要な意義を持つ。

例えば七種の第二、アティアグニ・ストーマ (Atyagniṣṭoma) は、通常のアグニ・ストーマ (Agniṣṭoma) 祭に「十六祭」(Ṣoḍaśin) の最後の段階、すなわち第十六番目のラウンドを付け加えて文字通り「最高のアグニ神讃歌」として成立する。それはインドラ神が神々の最後に生まれたのに、このショードグシン (Ṣoḍaśin) の第十六番目のラウンドによって最も高い位に達したという記述によっても明らかである(注20)。ここに、存在する全てのものを超越する“15+1”の意味がある。このことについては、後に詳しく検討するのであろう。

#### 4. 十六を意味する単語

##### (1) aṣṭi と bhūpa, nṛpa, rājan

このように古代インドで「十六」の概念が重視されてきたのであるが、先の1章でみたように、「十六」は数詞ショードグシャ (ṣoḍaśa) 以外にも幾つかの言葉によって暗示されていた。それらをまとめると、(1) aṣṭi、(2) bhūpa, nṛpa, rājan、(3) puruṣa、(4) kalā、の四種類となる。これらの語が何故「十六」の概念に結び付くのかを見てみよう。

まず、aṣṭi とは詩作法のタームで、四句六十四音節からなる韻律を意味する。従って、基本となるパーダ (pāda)、すなわち一句が十六音節からなることから「十六」という数字概念と結びついたものであろう。紀元

後五世紀のヴァラーハミヒラ (Varāhamihira) の天文学書 *Pañcasid-dhāntika* (9.9) には、この文字数字を使った表記がみられることが知られている(注21)。これは並列複合語 (Dvandva compound) で配列され、右から順に以下のように 21600 と読む。

0 0 16 2

kha kha—aṣṭi yamāḥ=21600

次に、王を意味する bhūpa, nr̥pa, rājan、これらはいずれも *Mahābhārata* の「ドローナの巻」(Droṇa-parvan, 7.65–71)などに描かれる十六王を背景とするもので、Vyāsa が Yudhiṣṭhira に語った、Marutta 王から Paraśurāma 王までの十六人の有名な王である。かれらは戦いの最中に Abhimanyu が死んでから、戦争に反対したと言う(注22)。なお、『法華経』などの仏典に説かれる「十六王子」あるいは「十六沙弥」もこれと起源を同じくしているのであろうか(注23)。いづれにしても、王が十六の象徴表現であるのは、この数の一致による暗示から成立したものである。

## (2) puruṣa

### [a] 十六からなるプルシャ

次に puruṣa を問題としたい。この語は幾つかのウパニシャッド文献に kalā を伴って現われる。例えば『プラシュナ・ウパニシャッド』(*Praśna-upaniṣad*)〈十六からなるプルシャ〉では、次のように述べられている。

ṣoḍaśakalam ... puruṣam vettha / (6.1)

sa puruṣo yasminn etāḥ ṣoḍaśakalāḥ prabhavantīti // (6.2)

sa prāṇam asṛjata, prāṇāc chraddhām kham vāyur jyotir āpaḥ pṛthivindriyam mano'nnam, annād vīryam tapo mantrāḥ karma

lokāḥ, lokeṣu ca nāma ca// (6.4)

arā iva rathanābhau kalā yasmin pratiṣṭhitāḥ / taṃ vedyaṃ  
puruṣam (6.6)

「十六部分からなるプルシャを知っていますか。」(6.1)

「かのプルシャにおいてこれら十六部分が生ずるのである。」(6.2)

「かれ（プルシャ）は生気を生み出した。生気から信仰、虚空、風、  
光、水、大地、諸感官、意、食物が〔現われ〕、食物から気力、苦行、  
諸のマントラ（聖句）、祭祀、諸世界が〔現われ〕、諸世界に名前が  
現われた。」(6.4)

「輻が‘こしき’に集まるように、十六部分の拠り所となるかのプル  
シャを知るべきである。」(6.6)

以上のように、プルシャ（原人）から世界のすべてとその名前があら  
われたのである。このプルシャは「生気・信仰・虚空・風・火・水・地・  
諸感官・意・食物・気力・苦行・諸の聖句（マントラ）・祭儀・諸世界・  
名前」という十六部分からなり、心臓に在るとされる。そして、それら  
は個々としてはそれぞれの名を持つが、全体としてはプルシャと呼ばれ  
るのみで、それはちょうど海に流れる川のようなものであると云われる  
(*Pras. Upa.* VI. 1~4)。また、輻の「こしき」におけるように、プルシャ  
は十六部分によるなどとも述べられている。

同じく最古のウパニシャッドとされる『チャーンドーグヤ・ウパニ  
シャッド』(*Ch. Upa.* VI. 7.1)にも、「バラモンよ。プルシャ（人間）は十六  
の部分より成り立っている。」(*ṣoḍaśakalaḥ somya puruṣaḥ*)と述べられて  
おり、プルシャと「十六」の古い結びつきがうかがえる。

## [b] プルシャと四分説

ところで、プルシャが十六部分からなるという説を検討する際、忘れ  
てならないのはインド最古の文献である『リグ・ヴェーダ』の「プルシャ

の歌」(Rg. 10.90.1~16)である。これは十六篇の歌からなる宇宙創造神話であり、神々が巨大なプルシャを犠牲獣として祭祀を行い、その各部分から世界の構成要素が生まれるようすを描いている。

puruṣa evedaṃ sarvaṃ yad bhūtaṃ yac ca bhavyam /  
utāmṛtatvasyeṣāno yad annenātirohati// <10.90.2>  
etāvān asya mahimāto jyāyāṃś ca puruṣaḥ /  
pado 'sya viśvā bhūtāni tripād asyāmṛtaṃ divi// <10.90.3>  
tripād ūrdhva ud ait puruṣaḥ pādo 'syehābhavat punaḥ /  
tato viṣvaṃ vy akrāmat sāsānānaśane abhi// <10.90.4>

「プルシャは、過去および未来にわたるこの一切(万有)なり。また不死界(神々)を支配す、食物によって成長するもの(生物界、人間)をも。」(10.90.2)

「一切万物は彼〔プルシャ〕の四分の一にして、四分の三は天界における不死なり。」(10.90.3)

「プルシャは四分の三を備えて上方に昇れり。彼の四分の一はここ(下界)に再び発生せり(現象界の展開)。これ(四分の一)より彼はあらゆる方面に進展せり、食するもの(生物)・食せざるもの(無生物)に向かって。」(10.90.4)(注24)

このように、原人プルシャは過去、未来を含めた一切万有である。彼は神々の世界ばかりでなく生物の世界と人間の世界をも支配する。それ程巨大なものなのである。しかし、それでも「十六からなる」この現象世界はプルシャの四分の一にすぎず、残りの四分の三は目に見えない天界の不死者であるという。このプルシャの四分の一を後代のウパニシャッドは上記のように「十六からなる」と説明したのである。この十六部分からなる現象世界という構想は、さらに下って、サーンクヤなどの後代の哲学に影響を及ぼすに至るのである(注25)。

一方、世界を四分する古説は同じく『リグ・ヴェーダ』(1.164, 165)に見られる。その中で、言語についての以下の四分説がある。

「言語は四個の四分の一〔よりなる〕と測定せられたり (catvāri vāk parimitā padāni)。靈感あるバラモンたち (詩人兼祭官) は、これらを知る。〔その中〕三個の〔四分の一〕は、秘密に隠されて運動せしめられず。言語の四分の一を人は語る。」(1.164.45) (注26)

これは本来、存在する言葉全体の四分の一が人界に流通しているという意味であるが、その他に、パーダ (pāda) と同義でここで用いられる中性名詞のパダ (pada 四分の一) が、韻律の「四分の一句」を意味すると解釈することも可能だろう。『アイタレーヤ・ブラーフマナ』(IV. 4)によれば、「十六祭 (ṣoḷaśin) に詩節として “apāḥ pūrveṣāṃ harivaḥ” と繰り返すことによって、すべてのソーマ儀礼 (savana) から構成された十六祭が成立する。このように知るものはすべてのソーマ儀礼から構成された十六祭によって繁栄する。mahānāmnī 頌から採った五音節の接頭音 (upasarga) を十一音節からなる [四つの] 句 (pāda) に添加する。このように彼はあらゆる韻律からなる十六 [音節からなる一句] を作る。このように知るものは、あらゆる韻律からなる十六祭によって繁栄する。」とある。この場合、四と十六はまたしても関連して登場する。そしてここでは明らかにパーダは四句からなる偈頌のうちの一句を意味する (注27)。

### [c] 四つ足とパーダ

この「四分の一」を意味するサンスクリット語「パーダ」(pāda) は、さらに「足」という意味でもある。その最古の用例の一つと見られる『アタルヴァ・ヴェーダ』(XIV. I, 60) には犠牲の動物の「四つ足」に言及しているし、その後続く『アイタレーヤ・ブラーフマナ』(VII.5.12) や『シャタパタ・ブラーフマナ』(VII.8,3,6 etc.) でも動物や鳥の足を意味する「パー

ダ」の語が見られる。この語を用いた象徴的な歌として『チャンドー  
グヤ・ウパニシャッド』(3.18)の「四足の説」がある。

tad etac catuṣpād brahma, vāk pādaḥ, prāṇaḥ pādaś cakṣuḥ  
pādaḥ śrotraṃ pāda ity adhyātmam; athādhidaivatam, agniḥ  
pādo vāyuḥ pādaḥ, ādityaḥ pādo diśaḥ pāda ity ubhayam evādiṣ-  
ṭaṃ bhavaty adhyāmaṃ caivādhidaivataṃ ca// (Ch. Uṣa. 3.18.2)

ここで言うように、最高神ブラフマンには、ことば(vāk)、氣息(prā-  
ṇa)、眼(cakṣus)、耳(śrotra)からなる内的な四足と、火(agni)、風(vāyu)、  
太陽(āditya)、方向(diś)からなる神的四足があるという。さらに「内的  
な四足」である、〈ことば、氣息、眼、耳〉は、「神的四足」である〈火、  
風、太陽、方向〉に、それぞれが依存して光り輝く(3.18.3~6)とされ  
る。この説は *Vedānta-sūtra* (3.2.33; 4.1.4) の典拠となり、シャンカラ  
によって詳説されたように、後世にも影響を与え続けた。

一方、同書の別の箇所(4.5.2~4.8.3)ではブラフマンの四足を次のよ  
うに定義する。

brahmaṇaś ca te pādaṃ bravāṇīti bravītu me bhagavān iti tas-  
mai hovāca prācī dikkalā praticī dikkalā dakṣiṇā dikkalodīcī  
dikkalaiṣa vai somya catuṣkalaḥ pādo brahmaṇaḥ prakāśavān  
nāma// (Ch. Uṣa. 4.5.2)

「汝にブラフマンの四分の一(一足)を教えよう。……東の方向がブ  
ラフマンの十六分の一(kala)、西……、南……、北の方向がその(ブ  
ラフマンの)十六分の一と名づけられる。以上ブラフマンの十六分  
の一が四つでブラフマンの四分の一(一足)であって、“空間を包含  
するもの”と名づけられる。」

この箇所とそれに続く叙述を併せて整理すると以下ようになる。

四足	足の名前	対応するもの
一足	空間を包含するもの (prakāśavat)	東・西・南・北
二足	無限なるもの (anantavat)	地界・空界・天界・大海
三足	輝きあるもの (jyotiṣmat)	火・太陽・月・電光
四足	抛り所をもつもの (āyatanavat)	氣息・眼・耳・思考作用

以上のようにブラフマンのそれぞれ四つの部分からなる四本の足を認識することが、現世および来世における至福をもたらすといわれる。この『チャンドーグヤ・ウパニシャッド』の記述は四とその自乗である十六の関係を示唆している。

「四分の一」を意味するサンスクリット語「パーダ」(pāda)は、四句で一首となる歌の形式を示す場合の「一句」(韻律全体の「四分の一」)なのであり、この語が韻律の基本形を示す重要な言葉でもあることは繰り返すまでもない。しかし、この語は同時に「足」という意味でもある。それは牛・馬、あるいは羊の足が四本で一体となっていることに由来するのであろう。遊牧をこととし、四句からなるマントラを唱えつつ、牛や馬を祭祀に捧げた古代アーリヤ人にとって、これらが上のような数字を暗示するものとなってゆく過程は想像するに難くない。

従って、十六(4×4)といえども四が基本であり、その意味で上の「四つの部分からなる四本の足」の引用は『リグ・ヴェーダ』の四分説と『ブラシュナ・ウパニシャッド』などの十六分説の中間形態を示していると言うことができる。ここにわれわれは、ヴェーダの供儀と韻律学の確立という背景の上で、四分説から十六分説へ展開した思考の連続性を認めるべきであろう。そして、それは「一切は祭式から」というヴェーダ学の常套語の再確認に他ならない。

なお十六本の足は、ヴァジュラヴァイラヴァ(Vajrabhairava)という仏教タントリズムの尊格の足に見ることができる。この尊格は九面で裸形、黒色の身体であり、左右ともに十六本の腕と、両足とも十六本を持つ姿

で描かれる(注28)。連想と暗示を好む密教思想はこれが十六空を象徴すると強弁する(注29)。しかし、これは「十六」という最もヒンドゥー的な概念を受け入れるための仏教側の妥協的な変容に過ぎない。いづれにせよ、ヴェーダの宗教の特色が密教として仏教に流入した一例である。

### (3) カラー

#### [a] カラーの語源と用法

カラーは「一部分」のほかに、「十六分の一」、あるいは「第十六」を象徴する語である。この語の語源ははっきりしないが、R.L. Turner の『比較印欧語辞典』(注30)によれば、kalā には二種あり、第一は『リグ・ヴェーダ』の用法で、その意味は“a small part”あるいはパーリ語やプラークリットの用法の“small amount, digit, division”であり、第二はドラヴィダ語起源のもので、学芸、技術などを意味するものであり、その語源を  $\sqrt{\text{kal}}$  (count, think) としている。

一方、J. Gonda は kalā は印欧語の  $\sqrt{\text{qel-}}$ 、*qela-*(壊す、砕く)あるいは  $\sqrt{\text{(s) qel-}}$ (切る)と同根であるかもしれないと推定している(注31)。もしそうであるなら、カラーは単なる「区分」が本来の語義であり、そこから全体=十六という概念が形成されるに及んで、十六と結び付くようになったのにすぎない。つまり、全体が十六からなるのなら、その一部分は全体(十六分)の一であり、それぞれがその第十六という意味にもなる。したがって、区分を原義とするカラーという語が「総体としての十六」の概念の成立に影響を及ぼしたのではないだろう。

また、カラーは時間の単位としても用いられる。しかしその基準は文献によって異なり、概して法典類などの古い伝承では96秒と共通して考えていた(『マヌ法典』(Ms. 1.64)、『実利論』(Arthasāstra, 20.28-36)、『ヴィシュヌ・プラーナ』(Chap. 3, Part 1))が、後代のシヴァ派の書とされる『デーヴィーバーガヴァタ・プラーナ』(第9編)(注32)などのよう



に、1/900 秒とする場合もある。これは本来、一日の1/900 (96 秒) が一秒の1/900 と誤って伝えられたものであろうか。

この語の最古の用例は、以下のような『リグ・ヴェーダ』「アーディティア神群に捧げる歌」に見られる。

yathā kalām yathā śapham yatharṇam saṁnayāmasi / evā duḥ-  
ṣvapnyam sarvam āptye saṁnayāmasi / (*Rg.* 8.47.17)

「我々が借財の十六分の一を、八分の一を、全部を〔他人の上に〕集めるがごとくに、まさにこのように我々は悪夢をすべて〔トリタ・] アープティア神の上に集める。」

これとほぼ同一の歌が『アタルヴァ・ヴェーダ』「悪夢を払うための呪文」(6.46.3, 19.57.1) にも存する。この歌には十六分の一 (kalām) と並んで八分の一 (śapham) という暗号文字も用いられ、古い時代からの数字文字への偏愛が窺われる。

この語 (śapha) は本来は「<sup>ひずめ</sup>蹄」という意味である。特に、馬あるいは牛の蹄が二つに分かれ、四本の足の合計 (4×2) から一頭につき八つの蹄があることになる。このことから「蹄」と「八分の一」という数字が結び付いたのであろう。これも「足」を意味するサンスクリット語「パーダ」(pāda) が、「四分の一」を意味するのと同じパターンである。

ただし、「パーダ」は、四句からなる偈頌のうち的一句、と言う意味でも「四分の一」なのであり、この語が韻律の基本形を示す重要な言葉でもあることは繰り返すまでもない。神を招請し、それに働きかけるために、複雑な儀軌に則って動物を祭祀に捧げる。その際、祭官によって唱えられるマントラは規定の韻律にしたがって注意深く為されなければならない。つまり、韻律と犠牲は祭祀に不可欠の要素なのであった。この意味で「十六分の一」や「八分の一」という数は、動物と韻律の双方に共有される「足」としての「パーダ」の概念に基づくものであり、パー

ダの含意する「四分の一」のヴァリエーションとみるべきなのである。我々はここに韻律と祭祀に果たす数の役割を指摘できる。

いづれにせよここで用いられる数字としてのカラーも、四の自乗という面から把握されるべきであろう。

### [b] 序数としての十六

十六に関する二つの言葉、ショーダシャ (ṣoḍaśa- 十六)とカラー (kalā 部分)の合成語“ṣoḍaśakalā”という語がある。これは「十六の部分を持つ」というバフヴリーヒ・コンパウンド (Bahuvrihi compound)と解釈できるが、これは構成要素としての十六の側面を表わす。また、この合成語とともに「第十六の部分」([ṣoḍaśi] kalā)という序数としての用法があり、それが「十五部分」に対立して用いられることがしばしば見られる。この例を以下のウパニシャッド文献から検討してみたい。

A. sa eṣa saṃvatsarah prajāpatiḥ ṣoḍaśakalah, tasya rātraya eva pañcadaśakalā dhruvaiivāsya sodaśi kalā. sa rātribhir evā ca pūryate 'pa ca kṣiyate so 'māvāsyāṃ rātrim etayā ṣoḍaśyā kalayā sarvam idaṃ prāṇabhṛdanupraviśya tataḥ prātarjāyate// (Br. Up. 1.5.14)

「かのブラジャーパティは一年であり、十六の部分を持つ (ṣoḍaśa-kalah)。その夜はまさしく十五の部分だけであり、不変なるもの(dhruva)のみがこの第十六の部分である。彼は夜のみによって満ちたり欠けたりする。新月の夜にその第十六の部分をもって、この生氣(プラーナ)を有するすべてに入り、それから[次の日の]朝になって生まれる。」

(『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』<1.5.14>)

B. yo vai sa saṃvatsaraḥ prajāpatiḥ ṣoḍaśakalo 'yam evaṃ sa yo 'yam evaṃvitpuruṣas tasya vittam eva pañcadaśakalā ātmaivāsyā ṣoḍaśī kalā sa vittenaivā ca pūryate 'pa ca kṣīyate tad etan nabhyaṃ yad ayam ātmā pradhīr vittam tasmād yady api sarvajyāniṃ jiyata ātmanā cejjivati pradhināgād ity evāhuḥ// (Br. Up. 1.5.15)

「かの十六部分をもつプラジャーパティ（生主）こそが一年である。この事を知る人も、またその同じ彼である。その財（富）は十五の部分であり、第十六の部分は彼自身である。彼はその富によって満ちたり欠けたりする。自身であるもの、それが「こしき」であり「そとわ」である。それゆえに若し人が全てを消失するとしても、自分自身で生存するならば「そとわ」のみ失っただけと云われるのみである。」 (『同書』〈1.5.15〉)

C. ṣoḍaśakalaḥ somya puruṣaḥ pañcadaśāhāni māśiḥ kāmam apaḥ pibāpomayaḥ prāṇo na pibato vicchetsyate// (Ch. Up. 6.7.1)

「我が子よ。プルシャ（人間）は十六部分から成り立っている。十五日間〔汝は〕食べ物食べてはならない。欲するままに水は飲め。生氣は水から成るものゆえ、水を飲む者の生氣は絶えないであろう。」 (『チャンドーグヤ・ウパニシャッド』〈6.7.1〉)

D. gatāḥ kalāḥ pañcadaśa pratiṣṭhā devāś ca sarve prati-devatāsu / karmāṇi vijñānamayaś ca ātmā pare'vyaye sarve ekī-bhavanti// (Mundaka Up. 3.2.7)

「十五の部分は各々その本源に帰り、全ての神々（諸々の感官）もそれぞれの神格（太陽など）に還る。そして諸々の業と知らなる自我とは、すべて至高不滅のもの（ブラフマンまたは神我）の中に入っ

て一体となる。」 (『ムンダカ・ウパニシャッド』〈3.2.7〉)

E. puram hantrimukhaṃ viśvamatū rave rekhā svaramadhyam  
tadeśā / brhātithir daśa pañca ca nityā saṣoḍaśikaṃ purama-  
dhyam bibharti / (*Triṣura Up.* 10)

「これは城である。邪鬼である。すべての母である日の線である。天  
空の中心（子午線）である。白月の日である。十五である。恒常で  
ある。城の中心をその十六分を有するものとともに支持する。」

(『トゥリプラ・ウパニシャッド』〈10〉)

これらの引用にあるように、全体を十六の構成要素から成るものと見  
た場合、第十六はそれ以前の第十五に対立し、かつそれらを包含する。  
したがって第十六こそが全体の本質であり、すべてを生み出す不変なる  
ものと位置付けられている。ここに、存在する全てのものを超越する  
“15+1”の意味がある。ヒーステルマンが断言するように、「第十六とは  
十五部分からなる全体に付加された特別な要素である。この性質によっ  
て第十六は直前の十五部分の全体を越えるばかりでなく、それらを包含  
するのである」(注33)。もちろんこの場合、ヒーステルマンが述べるように  
十五が全体なのではなく、「十六が全体である」と言い換えなければなら  
ないが、第十六の持つ超越的意味は彼が明言した通りである。

### [c] 月の食分

次に、シャークタ派 (Śākta) の代表的典籍である『マハーニルヴァー  
ナ・タントラ』 (*Mahānirvāṇatantra*) 中に説かれる月の十六の食分として  
の kalā について検討してみよう。ここで “kalāḥ somasya ṣoḍaśa” を  
「月の十六分」と訳したのは、ヴェーダ以来の伝統として「月」をソーマ  
酒の容器に見たてる考えにもとづいている。

viśeṣārghyajalaih śeṣam pūrayitvā samāhitaḥ / ṣoḍaśasvarabī-

jena nāmamantreṇa pūjayet / sacaturthinamo'ntena kalāḥ  
somasya ṣoḍaśa / (*Mahānirvāna Tantra*, 6.32)

amṛtā mānadā pūṣā tuṣṭiḥ puṣṭī ratir dhṛtiḥ / śaśinī candrikā  
kāntir jyotsnā śrīḥ pritiḥ āṅgadā / pūrṇā pūrṇāmṛtā kāmādāyin-  
yaḥ śaśinaḥ kalāḥ // (*ibid.*, 6.33)

「特殊なアカ水 (arghyajala) をもって、[容器の] 残りを一杯にして、  
精神集中しつつ、第四格 (Dative) を帰礼の〔語〕末に有し、十六の  
音節を種子とする名前のマントラによって、月 (soma) の十六分が  
供養されるべきである。」(『マハーニルヴァーナ・タントラ』〈6.32〉)  
「アマリタ、マーナダ、プーシャー、トゥシティ、プシティ、ラティ、  
デウフリティ、シャシン、チャンドウリカ、カーンティ、ジョーツ  
ナー、シュリー、プリーティ、アングダー、プールナー、プールナー  
ムリター、これらが願いを適える月のカラーである。」(『同書』〈6.  
33〉)

マントラに精通した祭官は〔「逆の字母」(vilomamātrkā) という〕マン  
トラを誦しつつ、アカ水 (接待の水) の容器に酒と水を満たす。そして、  
精神を集中し、十六の月分の名前を唱える。そのマントラは十六音節を  
種子にもち、与格で唱えられる。こうして十六の月分を崇拜すべきであ  
るといい、ついで本偈頌のように、アマリタ以下の十六のカラーの名  
(amṛta, mānadā, pūṣā, tuṣṭi, puṣṭī, rati, dhṛti, śaśinī, candrikā, kānti,  
jyotsnā, śrī, priti, āṅgadā, pūrṇā, pūrṇā, pūrṇāmṛtā) を列挙する。そしてこ  
れらが願いを適える月のカラーであるという(注34)。

注目されるのは、新月 (amṛta) から満月 (pūrṇa) までの十五日の最後  
に、第十六日の pūrṇāmṛtā (満月の死) を加える点である。新月から満  
月までの白い半月と再び新月に至るまでの黒い半月の接点である緩衝  
日、それをこの様に「満月の死」あるいは「満・新月」として設定した  
のであろう。しかし、この満月の次の日、「満月の死」(pūrṇa-āmṛta) は

すなわち「満月の不死」(pūrṇa-amṛta) と解釈することも可能である。

このように kalā と月の陰分とを関連させた解釈はすでに『ヴィシュヌ・プラーナ』(II, Chap. 12)に見られる。このプラーナではさらに神話的な物語が述べられており、神々が十五日間でこのソーマの容器に見立てられた月、すなわちソーマ酒を飲んでゆき、最後の十六分の一は聖なるカラーと呼ばれる不死(amṛta)であり、これは祖先が飲み干すことになっている(注35)。この話からすれば、先の第十六のカラーは「満月の不死」(pūrṇa-amṛta) と解釈すべきなのであろう。

十六は完全な数、全体であるとともに不滅の数である。この数あってこそ他の数は無限に連続し、再生を繰り返すのである。それはちょうど、月が月齢の16日目に至ると、また新月に向かって欠け始めるゆえに、日々の流れが永遠に続けられるのに似ている(注36)。

一方、インドの数字の概念によれば「十五」を象徴する文字はティティ(tithi)、つまり太陰日である。これはいわゆる平均朔望月(注37)を三十等分したもの、今の場合は半月を十五等分したもので、太陰暦の長さの変動を避けるために考案された概念といえよう(注38)。

ティティは朔を出発点として人工的に区切られてゆく。これを計算すると約23時間37分28秒に相当するので、実際には一日に付き約22分32秒づつずれてゆく。したがって、日の出から始まる一日のうちに二回のティティの区分を含む日が生ずることになる。この場合、二回目のティティは暦の日付に参加しない。(これが二十九日からなる小の月となる。)この現実の日付の誤差を調整するために想定された概念を欠日(kṣāyadina)という。概念上は存在していながら実際には認められないこの太陰日は、先の『マハーニルヴァーナ・タントラ』の第十六の月分と対応する。また、このような普遍的な第十六を含意するカラーとティティの繋がり、は、「十六」という概念が韻律の規定を起源とすると同時に、暦法の概念によって成立し、支持されたという推定を可能にするであろう。

#### [d] その他の主なカラー用例

「[[故意の]シュードラの殺害に対しては、[バラモン殺害に対する贖罪の]十六分の一であることを知るべきである。」(Ms. 11.127)というような、十六分の一を表わす用例と、「十六分の一にも値しない」(kalām nār-hanti ṣoḍaśim)という句におけるカラーについては、すでに述べたので略す。

これらと同じく、部分を意味するカラーとして、『般若経』の「彼等の知恵は、かの知恵の完成を实践する菩薩の知恵の百分の一にも及ばない。千分の一にも、十万分の一にも、数量にも、一部分にも (api kalām ... nopaiti)、計算にも、比喩にも、類比にも、相似にも及ばない。」(注39)という用法もある。この形式は『金剛般若』(16. b)、『法華経』などとも共通するもので、後代の大乘仏典にしばしば見られる用例である。

その他、『カーマーストラ』や『シャイヴァタントラ』に述べられるような六十四芸などの「学芸・たしなみ」を意味する場合や、『八千頌般若』(注40)の “kalā, kāvya, mantra, vidyā, śāstra, nimitta, dharmārtha” と、当時の文学様式を表わす熟語と並列的に述べられる用例があるが、これについては本文16頁のように、別の語源を想定すべきであるのかもしれない。

### 5. 十六の概念の固定化と展開

このようにして確定した総体あるいは全体としての「十六」と、常住不変な「第十六」という概念は、ヒンドゥー教・仏教・ジャイナ教に係わりなく伝えられていった。

例えば、釈尊在世の頃、あるいはそれより少し以前の独立国家の状況を示すものとして、十六大国という説がある。宮坂宥勝氏によれば、「これは仏教興起時代のアンガ、マガダ、カーシ、コーサラの四大国を原型として、それに新古の種族社会を加えたものが、十六大国の類型を形成

した」という(注41)。また、十六大国の類型が *Mahāvastu*(注42)や『増支部』(注43)、『ジャータカ』(注44)などに記載されているように、仏教文献ではかなり古くから婁々現れるにも拘らず、バラモン諸法典に表れない。従って同氏が推定するように、この説は仏教徒の手により、おそくともマウリヤ王朝の最盛期、紀元前三世紀頃までに成立したのであろう(注45)。

『増支部』によれば十六大国 (*soḷasannaṃ mahājanapadānaṃ*) とは、*Āṅga*, *Magadha*, *Kāśī*, *Kosala*, *Vajji*, *Malla*, *Ceti*, *Vaṅga*, *Kuru*, *Pañcāla*, *Maccha*, *Sūrasena*, *Assaka*, *Avanti*, *Gandhāra*, *Kamboja* の十六カ国である。しかし、これらの国々の主権者となって支配したとしても、かれは八部を備えた[完全な]布薩の十六分の一にも値しない (*aṭṭhaṅgasamannāgatassa uposathassa ekaṃ kalaṃ nāgghati soḷasim*) と述べられている(注46)。したがって、この部分は「十六」の概念が特に強調されていると見るべきであろう。つまり、この文脈では十六の意味こそが注意されるべきであって、十六大国の史的内容なのではない。しかも、実際のところ十六大国は同じ時代に独立国家として成立していたわけではないことは、すでに学者の指摘する所である。いずれにせよこの十六大国説は、十六という総体概念の受容によって形成されたものであるから、十六の概念が生んだ幾つかの括り型の一つといえよう。なお、この説は仏教ばかりでなく、ジャイナ教文献(注47)にも見えるもので、当時の知識人に意識されていた可能性もある。

このようにして成立した十六の伝統は、次々に類似の概念を作っていった。部派仏教の修道論で説かれる十六心(注48)、四諦十六行相(注49)、大乘仏教で強調された如来の十六大悲、あるいは十六種の如来の菩提の相 (*ṣoḍaśākāratathāgatābodhi*)(注50)、『宝積経』や『大般若波羅蜜多経』の十六分(注51)、十六羅漢、十六善神、十六三昧、十六遊増地獄、十六知見、十六外道、十六空、賢護などの十六賢士 (*satpuruṣa*)(注52)、さらには主に密教文献で説かれる賢劫十六尊、十六執金剛神、十六薬叉、十六大



護、金剛マンダラの十六大菩薩、金剛手などの十六菩薩、後十六生成正覚<sup>(注53)</sup>、なども同類のものである。これらは現実にある多くの要素を体系化した結果、十六に纏められたというより、予め存在する十六という法数体系に合わせて、現実を十六分に整理して、全体を把握しようとしたものと云うべきであろう。

この傾向はタントリズムにおいて特に重視されたようである。思い付くままに例示すると、十六歳の乙女という女神(kumāri)崇拜<sup>(注54)</sup>、あるいは男女両性原理に基づくシンボリズムで重視される般若(prajñā)としての十六歳の乙女<sup>(注55)</sup>、あるいは十六歳の少年<sup>(注56)</sup>、ドゥルガーの化身である十六(Ṣoḍaśī)という名の女神<sup>(注57)</sup>、ガウリーなどの十六人の神母、『サウダリヤ・ラハリー』(第32偈)などに述べられる「シュリー・ヴィディヤー」(吉祥明)という十六文字からなる秘密のマントラ、十六葉の花弁の蓮華の形をしたチャクラ(viśuddha-cakra)、その上にある十六の母音、『タントラサーラ』に説かれる認識の種子となる十六の母音、ヴィシュヌ派でとなえられるカリユガ期の災いを除くクリシュナを称える十六の名号とマントラ、神々を招請する礼拝で使用される十六種のウパチャーラ(upacāra 供え物)<sup>(注58)</sup>、『十六常恒女荒海』(Nityaṣoḍaśikārnava)などのようなタントラ文献の名<sup>(注59)</sup>、これらはすべて同じ伝統に根差したものとといえるだろう。ヴェーダの伝統に端を発する「十六」の概念は、その共通の土壌の中で育まれた宗教文化に大きな影響を与え続けた。タントリズム、もちろんその仏教的変容である仏教タントラも含めて、それが伝承の代表格といえるのは、これらの用例を見るだけで瞭然であろう。まさに十六の概念がタントリズムの中で再生されたといっても良い。タントリズムの象徴主義がかくも十六の概念を愛好せしめたのであろうか。

以上、「十六」の概念(kalā, ṣoḍaśa-)は、完成を暗示する「四」を基本としてその四倍からなり、総体や全体を意味するものとなった。祭祀

に起源を有するこの語は、インド最古の文献にすでに登場し、音韻学や天文学の発達にもなって、インド独特の暗示や連想の働きによってさまざまな宗教文献に述べられてきた。しかも、いったんその伝統が確立してからは、様々な事象を「十六」という数に合わせて整理、解釈するようになる。すると今度は、十六という法数体系に従って現実を意味づけ再構成するに至る。これは、いわば現象が「十六」という概念によって拘束されるという、成立過程と逆の動きを示したことになる。特にタントリズムにおいてこの傾向が顕著であり、十六に基づいたさまざまな儀礼や行法が生まれたことをわれわれはすでに見てきた。ここにインド文化に於ける十六の役割と、象徴主義にみられる数の偏愛の一端とを明らかにすることができたと思う。

### 【注】

\* 「十六」についての体系的研究については、すでにホンダ (J. Gonda) の “The Number Sixteen”, *Change and Continuity in Indian Religion*, Mouton & Co, The Hague, 1965, pp.115-130. というヴェーダ文献を中心とした勝れた研究がある。筆者は迂闊にもこの論文を本稿執筆時の直前まで知らずにいた。当然、その用例の多くは本論と重複するばかりでなく、筆者未見のものも多いのであるが、本稿によって筆者が示し得た部分や、多少の観点の相違もあるので、全体の構想を変えることなく、ここにそのまま提出することにした。読者諸氏の寛恕を乞う次第である。

### 序

(1) *Manu-Smṛti, with nine commentaries by Medhātithi, Sarvajñanārāyaṇa, Kullūka, Rāghavānanda, Nandna, Rāmacandra, Maṇirāma, Govindarāja and Bhāruci*, ed. by J. H. Dave, Bharatiya Vidya Bhavan, Bombay, 1972.

*Manu-Smṛti, with the Manubhāṣya of Medhātithi*, ed. by G. Jha, Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta (Bibliotheca Indica, No. 256), 1939.

(2) *The Kautīliya Arthaśāstra*, 2 vols., ed. by R. P. Kangle, University of Bombay, 1969.

## 第一章

- (3) F.M. コンフォード著、廣川洋一訳『宗教から哲学へ——ヨーロッパの思维的起源の研究』東海大学出版会、1987、pp.243~253.
- (4) G. ショーレム『カバラとその象徴的表現』法政大学出版局、1985.
- (5) E.W. Hopkins, "Numerical Formulae in the Veda and their Bearing on Vedic Criticism," *Journal of the American Oriental Society* 16, New Haven, 1896, pp.275—281.

A.B. Keith, "Numbers (Aryan)," *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, Vol. 9, ed. by J. Hastings, New York, pp.407—413.

B. Walker, "Numbers," *Hindu World*, Vol. II, pp.136—137, George Allen & Unwin, 1968 (Reprint, New Delhi, 1983).

P.V. Kane, *History of Dharmasāstra*, Vol. V, part 1, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1974, pp.701—705.

G. Bühler, *Indian Paleography*, Munshiram Manoharlal Publishers, New Delhi (Reprint 1980), pp.103—107.

J. Gonda, *op. cit.* —, "Harmony, Symbolism of Numbers, Colours, etc.; Continuity," *Vedic Ritual, the Non-solemn Rites*, E. J. Brill/Leiden-Köln, 1980, esp. pp.39—41.

松濤誠達「古代インドにおける数のシンボリズム——7の考察——」『仏教学』16、1983、pp.29—46。

同「古代インドにおける数のシンボリズム——『シャタパタ・ブラーフマナ』を中心とした7の検討」『竹中博士頌寿記念論集 宗教文化の諸相』、山喜房仏書林、1984、pp.691—704。

同「古代インドの祭祀における数の問題——序章・1、2および3の考察」『宗教研究』256、1983、pp.55—68。

同「古代インドにおける数のシンボリズム——8の意味するもの——」『大正大学研究紀要』72、1986、pp.1—16。

## 第二章

- (6) Kullūka 注による pākayajña の区分。ただし、Maṇirāma の注は vaiśvadeva, balikarma, nityasrāddha, atithibhojanātmakā の四種とする。Cf. J. H. Dave ed., *op. cit.*, p.293.
- (7) catunnaṃ dipānam paṭilābho catunnaṃ dhammānam paṭilābhassa kalam nagghati soḷasinti// (S.N. Vol. 5, p.343)
- (8) na so saṃkhatadhammānam kalam agghati soḷasim / (P.Dh. 70),

*Dhammapāda*, ed. by P.L. Vaidya, the Oriental Book Agency, Poona, 1934.

- (9) na taṃ buddhe, or dhamme, or saṃghe prasādassa / kalām aśyati ṣo-  
ḍaṣim// (21.382—388) *Buddhist Hybrid Sanskrit Dhammapāda*, ed. by  
N. S. Shukla, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1979, p.41.
- (10) この章は、É. Senart ed., *Mahāvastu*, tome III, p.434, 1.12 にも『法句経』  
の“千という[数にちなんだ]章”に説かれる (dharmapadeṣu sahasravargam  
bhāṣati) と引用されるように、かなり古くから知られていた章節であった  
ようだ。そうであれば、これは「十六」の歴史的意義を解明するための有  
力な仏教側の資料であるが、その当時、すでに十六の語が含まれていたか  
どうかを確認することは今では不可能である。
- (11) 初期仏教の呼吸法は四念処の形式を借りることによって、四事から十六事  
に発展したが、このことについては、松田慎也「初期仏教における呼吸法  
の展開」『仏教学』15号、1983、pp.49—68を参照。
- (12) 金、雲母、水銀、磁鉄鋼の粉を、特定の地域で所定のタントラの祭儀に従っ  
て満月の日に採取された月水 (candrodaka) に混ぜあわせる。これに熱を  
加えて〈固定された〉水銀を、さらに月水に浸して聖化する。その水銀を  
地下処理装置 (bhūdharayantra) にかき、再びピージャを用いてマヒータ  
ラ (medinī) と呼ばれる加熱装置で処理する。この水銀を地下処理装置に  
掛ける以下の操作を十六回繰り返すのであるが、その際、水銀とピージャ  
を十六分の一ずつ使用するのである。その詳細は佐藤・小森田訳著『イン  
ド錬金術』東方出版、1989、pp.109、123、182—184参照。
- (13) 中野義照『インド法の研究』日本印度学会、1974、p.284.及び、P.V.Kane,  
*History of Dharmasāstra*, Vol. II, Part I, Bhandarkar Oriental Research  
Institute, Poona, 1974, pp.402—403.参照。
- (14) PTS, *Jātaka*, Vol. I, p.285.

### 第三章

- (15) Cf. *Āśvalāyana Śrautasūtra*, 1.4.6.及び、ウパニシャッド全書III、p.322 参  
照。
- (16) 松濤誠達「古代インドの宇宙観」『アジアの宇宙観』(岩田・杉浦編) 講談  
社、1989、p.260. 詳しくは J.C. Heesterman, *The Ancient Indian Royal  
Consecration*, Mouton & Co.: 's-Gravenhage, 1957, p.13 を参照。
- (17) *Pañcaviṃśa Brāhmaṇa*, 17.1.1—4.3.及び、辻直四郎『古代インドの説話』  
春秋社、1978、pp.134—136 を参照。

- (18) P.V. Kane, *op. cit.* pp.193—194.  
 (19) W. Howard, *Sāmavedic Chant*, Yale University Press, New Haven and London, 1977, p.53.  
 (20) *Taittirīya-Saṃhitā*, 6.6.11.2.

#### 第四章

- (21) G. Bühler, *op. cit.*, p.105.  
 (22) 特に〈7.73〉を参照。Cf. E.P.Rice, *The Mahābhārata, Analysis and Index*, Oxford University Press, London, 1934, pp.38—39.  
 (23) 三友量順『「十方諸仏」と十六王子』『印仏研』36—2, pp.304—311。  
 (24) 辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫、319頁より引用。  
 (25) 『サーンクヤ・カーリカー』では、作りもせず作られもしないブルシャに対し、「十六からなるもの (ṣoḍaśaka) は作られたもの (vikāra) である」(3) といい、さらにこの十六の一群 (guṇa) すなわち、五統覚器官 (buddhīndriya)、五行動器官 (karmendriya)、意 (manas)、五大〔微細〕元素 (mahābhūta) は「自我意識から生じ、地・水・火・風・虚空の五粗大元素が生ずる」(2)といわれるように、現象界の具体化のための原因として位置づけられる。  
 (26) 辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫、303頁より引用。  
 (27) この意味での pāda の用法は『カウシータキ・ブラーフマナ』(XXVI.5)にもみられる。  
 (28) 大正 21、206 上。  
 (29) 大正 18、601 上、593 下。  
 (30) *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages*, Oxford University Press, London, 1966.  
 (31) 冒頭の注\*に引用した J.ホンダの論文を参照。  
 (32) マニの『ブラーナ辞典』の資料からの検算による (V. Mani ed., *Purānic Encyclopaedia*, Motilal Banarsidass, Delhi, 1975, p.372)。一般には Devī-Bhāgavata-purāna は、十八マハー・ブラーナには含まれない。それより後に成立した副次的ブラーナ (Upapurāna) に含められ、シャクタ派の文献とされる。そのタイトルが示すように、最高の神格であり、あらゆる神々のエネルギー (シャクティ) である Devī 女神への賛歌を扱う。詳しくは、*Studies in the Upapurāna*, Vol. II, R. C. Hazra (Calcutta Sanskrit College Research Series No. 12), Sanskrit College, Calcutta, 1979, pp.349—445 を参照。テキストの出版については、ヴィンテルニッツ著、中野義照訳『叙

事詩とブラーナ』日本印度学会、高野山、1965、pp.256—257、437—438.に詳しい。

- (33) J.C. Heesterman, *op. cit.*, 1957, p.13 を参照。
- (34) A. Avalon ed., *Mahānirvāṇa Tantra*, with the commentary of Hariharananda Bharati (Tantrik Texts Vol. 13), Motilal Banarsidass, Delhi, 1977 (Repr.), p.129.
- (35) N. S. Singh ed., *Viṣṇu Purāna*, a System of Hindu Mythology and Tradition, with Eng. trs by H.H. Wilson, Nag Publishers, Delhi, pp.343—344.
- (36) トウッチ著、ネパール美術研究会訳『秘の美 ネパール』大陸書房、1982、15頁。
- (37) ティティの使用は惑星の周期や月の理論と全く同じようにして、バビロニアからヘレニズム占星術へと浸透した。バビロニア人は推算暦を確定するために、平均朔望月と、これを30等分した時間の単位を用いた。しかし、かれらはこれに特別な名前を付けず、単に「日」とのみ云っていた。これを受容した古典期のインド天文学では Sūrya-siddhānta などに見られるように一定の平均の長さであった。しかし、後代のインド天文学では真太陰月の  $1/30$  としてその長さが増えるようになったという。O. ノイゲバウアー著・矢野道雄 斎藤潔共訳『古代の精密科学』恒星社厚生閣、1984、117、173頁。矢野道雄編『インド天文学・数学集』（科学の名著1）朝日出版社、1980、24、53、113、364頁を参照。
- (38) 月が朔、つまり新月から次の朔（白月）へ、あるいは望、つまり満月から次の望に至る（黒月）までに要する時間で、約29日12時44分2秒8に相当する。十五と結び付くのはこの白月と黒月の分け方によるものであろう。
- (39) N. Dutt ed., *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* (Calcutta Oriental Series, No. 28), London, 1934, p.39, ll.10—12.
- (40) P. L. Vaidya ed., *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* (Buddhist Sanskrit Texts—No. 4), Darbhanga, 1960, p.167, l.20.

## 第五章

- (41) 宮坂宥勝『仏教の起源』山喜房仏書林、1971、416頁。同「仏教興起の時代と社会的背景——十六大国考——」『駒沢大学仏教学部論集』21、1990、1—14頁。
- (42) É. Senart ed., *Le Mahāvastu*, Meicho-Fukyū-Kai, 1977 (1st., Paris 1882),

Vol. 1, p.34; ll. 9—10.

- (43) PTS, *Āṅguttara Nikāya*, Vol. 1, pp.212—213.
- (44) PTS, *Jātaka* 1, p.384, 504; Vol. IV, p.184.
- (45) 宮坂有勝、同書、p.421。
- (46) *Op. cit.*, p.212, ll. 4—5.
- (47) *Bhagavati-sūtra*, Saya 15, Uddesa 1. ただし、これは上記のものとは構成が異なる。宮坂有勝、前掲書、417頁。
- (48) *Kathāvathūppakarana-atthakathā*, Report for 1889 by T.W. Rhys Davids, *Journal of the Pali Text Society 1889*, London, p.42.; P. Pradhan ed., *Abhidharmakośabhāṣyam*, K.P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1975, p.251, (VI. 28). 見道の十五心を過ぎて、修道の第十六心に入るという構造は、第十六心が前十五心の基礎に立ちながら、それらを超越するという十六の概念を象徴する。
- (49) 四諦十六形相の解説、及びその成立については、森章司「有部阿毘達磨仏教における四諦説(一)・(二)・(三)」(『国訳一切経 三蔵集』第三輯、大東出版社、1978.) 特に 249—254 頁を参照。
- (50) 『智光明莊嚴經』『陀羅尼自在王經』『菩薩藏經』などの如来蔵系統の經典に説かれる。高崎直道氏はこの経緯を次のように推定している。「『智光明莊嚴經』が菩提の相を任意に列挙していたのを、『陀羅尼自在王經』が採用して、己の法数体系(四の倍数を法数の基準にする)に合わせて十六相とし、さらに「菩提即大悲」を強調して〈如来の十六悲〉となすけた。その後、他の經典もこの法数にならって菩提の十六相を数えるようになる。」(高崎直道『如来蔵思想の形式』春秋社、1974、619 頁以下参照。)
- (51) 瑜伽行派の最も重要な論書である『瑜伽論』の「摂決択分」と『宝積經』の注釈である『大宝積經論』とは共に『宝積經』を十六分して解釈する。この分段としての十六分、十六(種)相は「一切法を包摂する」、もしくは「あらゆる教を略摂する」といわれる。この意味から考えても、『宝積經』はおそらく当時知られていた代表的な經典をまんべんなく盛り込んで、一つの大仏教全書を確立しようと目論まれた經典であったと思われる。十六の分段の内容については、高崎直道「『宝積經』と『瑜伽論摂決択分』」(『インド哲学と仏教・藤田宏達博士還暦記念論集』平楽寺書店、1989)、473—495 頁、特に 475—477 頁を参照されたい。

一方、十六会からなる玄奘訳『大般若波羅蜜多經』は、チベット訳や写本の現存状況から判断すると、インドにてこの様な形で撰述されていたのではなく、玄奘によって「十六会、600 卷」に編集されたものかもしれない

- い。しかし、十六の意味するものを玄奘が知っていて、このような叢書となしたと推定することは十分可能であろう。
- (52) 拙稿「対告衆としての Satpuruṣa」(『東洋大学大学院紀要』18集 1982.3)、79—92頁参照。
- (53) 密教の規定の修行に励むものは「現世において歓喜地を得、十六度転生した後に菩提を成ず」というもの。『金剛頂經多羅菩薩念誦法』(大正20、457中)、『金剛頂經瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌』(大正20、497上)、『金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法』(大正21、708下)、『金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』(大正18、331中) etc.にある。
- (54) ジュゼッペ・トゥッチ著 金岡・秋山共訳『マンダラの理論と実際』(金花舎、1992.3) 第5章の脚注66)を参照。
- (55) D.L. Snellgrove ed., *The Hevajra Tantra II*, Oxford University Press, 1953, iii, pp.13—14.
- (56) 「十六歳の少年」という表現は、Caṇḍamahāroṣaṇa, Khasarpaṇa, Hevajra などの尊容に見られる。(Cf. C.S. George ed., *Caṇḍamāharoṣaṇa Tantra*, American Oriental Society, New Haven, 1974, p.24)。また本文7頁に引用した『ラサールナヴァカルパ』にも、何回か見出すことができる。例えば、シャシュティ種の朶を毒性の水 (viṣodaka) とともに打ち砕き、水銀と山羊の乳に混ぜて丸薬を作る。これをミルクとともに一日一個服用する。一カ月間それを服用した人は、皺と白髪から解放され、十六歳の少年のような姿になり、身体成就に到達するという(第743偈)。
- (57) Cf. D. Kinsley, *Hindu Goddesses*, Motilal Banarsidass, 1987, pp.161—163.
- (58) Cf. J. Woodroffe, *Principle of Tantra*, Part II, Ganesh & Company, Madras, 1978, pp.508—509. 同書には十六種のウパチャーラの具体名と *Mantraratanāvalī* 所説の別種のウパチャーラが記されている。
- (59) シャークタ派の二大宗派の一つであるシュリー・クラ派の代表的典籍、Bhāskararāya 作の *Vāmakeśvaratantra* の一部。Ānandāśrama Sanskrit Series No. 56, Poona, pp.36ff.に収録されている。

※最後になったが、本稿なるに及び貴重な助言を下された吉岡司郎氏と、金沢篤氏に感謝申し上げます。